

## 事業成果報告書

1. 個人または団体名(団体の場合は代表者名も記入)
高橋 英子
2. 研究または活動のテーマ(課題名)
「福島県における6次産業化の推進と農業者の実践的取り組み」
3. 助成額
390,000円
4. 実施期間
2013年 7月 ~ 2014年 6月
5. 実施状況
<p>H25. 7月~H26. 6月 農業, 6次産業化, 女性農業者, GT, 地域ブランドなどについて文献にて調べる</p> <p>8月29日 学習会「農山村再生を考える」に参加(東京)</p> <p>8月30日 講演会「気付く, みがく, つなげる地域の魅力」に参加(東京)</p> <p>9月12日 学習会「攻めの農業改革と経営」に参加(宮城県仙台市)</p> <p>10月7日 講演会「地域に根付く6次化商品の開発」に参加(伊達市)</p> <p>10月29日 農家レストラン訪問(伊達市)</p> <p>11月14日 全国グリーンツーリズムネットワーク福島大会に出席(二本松市東和町)</p> <p>11月28日 あぶくま農と暮らし塾講演会及び交流会に参加(二本松市東和町)</p> <p>12月7日 講演会「地域再生への道」とパネルディスカッションに参加(伊達市)</p> <p>12月11日 農業就農相談センターにて農業の現状や就農などについて話を伺う(福島市)</p> <p>H26. 1月10~11日 農家レストラン, 農家民宿の調査(二本松市東和町)</p> <p>1月11日 郷土料理イベント及び講演会(仙台市農家レストラン代表)に参加(二本松市東和町)</p> <p>1月11日 グリーンツーリズムの推進と地域づくりについて聞き取り調査(二本松市東和町)</p> <p>2月8~9日 先進事例研修に参加, 持続可能な農的暮らしについて学ぶ。(千葉県)</p> <p>3月16日 避難者の方々との蕎麦打ち交流会に参加, 情報交換する。</p> <p>4月22日 農林事務所にて農業の現状について話を伺う。</p> <p>(5月16~17日 喜多方市GTサポートセンター, 市GT推進室, 農家民宿に調査予定だったが延期)</p> <p>6月5日 喜多方市GT推進室に聞き取り調査(喜多方市)</p> <p>6月6日 ・「か〜ちゃんのカプロジェクト協議会」に聞き取り調査(福島市) ・福島地域センターにて農水省の6次産業化推進の現状について話を伺う。(福島市)</p> <p>6月21~22日 南相馬市ふるさと回帰支援センター, 農家民宿に聞き取り調査(南相馬市)</p>
<p>※ 助成のおかげで充実した調査を実施できましたことに心より御礼申し上げます。また一人ひとりの農業者の皆さんの頑張りと思いに触れることができ, 私自身の大きな財産となりました。調査に協力してくださった皆様にも心より感謝申し上げます。</p>

## 6. 事業成果と自己評価

**【事業の成果】** 農業生産を加工や流通・サービスまで一体的に捉え、付加価値を高めることを農業の6次産業化という。2011年3月にいわゆる「六次産業化法」が施行、6次産業化は国の成長戦略にも位置づけられ、農家の所得拡大と地域活性化の両面から期待と関心が高まっている。一方で、2011年の東日本大震災及び原発事故で福島県は甚大な被害を受け、とりわけ農業分野では放射能漏れによる実害及び風評被害の影響が大きい。困難な状況下、県内で6次産業化に取り組む農業者の現状や思いを確認したいと考え、下のおり事例調査研究を実施した。

事例1：津波被害から再出発 農家民宿と菓子工房を復活させたSさん（南相馬市）

事例2：避難先で仲間と力を合わせて事業を開始「か〜ちゃんの力・プロジェクト協議会」

事例3：有機栽培農業で培った地域の力と土の力を再確認（二本松市東和町）

事例4：官民一体でグリーンツーリズムを推進，都市農村交流人口の回復に取り組む（喜多方市）

資料：ふくしまの6次化産品をPR「ふくしまおいしい大賞」 （各事例の詳細は別途報告につき省略）

以上の調査により、各農業者が震災や原発事故後の困難な状況を受け止めながら、地域の復興や事業の再開・開始に前向きに取り組んでいることがわかった。共通した特徴として次の点を指摘したい。

**①これまでの活動の延長線上に震災後の活動の発展的展開がある。要因として、復興を志向する内的要素に加え、専門家の人的支援や情報提供，経済的支援といった外からの支援も支えとなっている。**

事例1の津波被害を受けたSさんは、「6次産業起業による復興まちづくり支援事業」に応募，農家民宿と菓子工房事業の再開を果たした。事例2の「か〜ちゃんの力」では、女性農業者達の食品加工の技術を避難後も活かし、2011年10月に新たに事業を開始した。福島大学の応援・協力を受けている。事例3の東和町では原発事故後も野菜の有機栽培の継続を決め、各農家の作付けを励まし続けた。その後有機農業研究者達が放射能汚染の影響を継続的に調査しアドバイスを受けている。事例4の喜多方市では、東京工業大学が土を計測して安全を確認，農業体験の信頼回復に取り組んでいる。

**②放射性物質検査を徹底し，科学的データに基づき安全を証明する努力を継続しておこなっている。**

南相馬市直売所，東和町道の駅，「か〜ちゃんの力」では、独自に放射性物質測定機を所有し測定し、安全が確認できたものだけを消費者に提供している。さらに「か〜ちゃんの力」では、国の基準より厳しい20ベクレルを自分たちの安心基準に決めている。喜多方市の土の分析は前述のとおりである。

**③地域の農業者が励まし合って活動を再開・継続したり，また事業を通じて地域に人の集う場を作ることを目指すなど，まさに地域活性化を目指す「コミュニティ型6次産業化」の取り組みである。**

南相馬市のSさんは、地域の人が気軽に集える場になればと「農家カフェ」を震災後新たに始めた。飯舘村のWさんは、避難している人に仕事と役割を作りたいと弁当などの事業を頑張っている他、避難者や地域の方が集う場と機会と作るためイベント開催や店舗の改装も行っている。喜多方市では、風評被害で農業体験が激減したが、農家民宿の女性達は2012年に「めんこいクラブ」を結成し、お互い助け合い学び合いながら地域に元気を発信している。これらの活動は大規模化を志向する「産業型6次産業化」とは異なるが、地域の活性化につながる「コミュニティ型6次産業化」の取組みといえる。

**【自己評価】** 本調査研究により、6次産業化の動向を確認でき、震災以降の県内農業者の取組みの現時点でのまとめを得ることができた。目標は大いに達成できた。今後は、今回の調査をもとに継続して県内農業や6次産業化に着目し研究を続け、学会発表や博論執筆につなげていきたいと考える。